

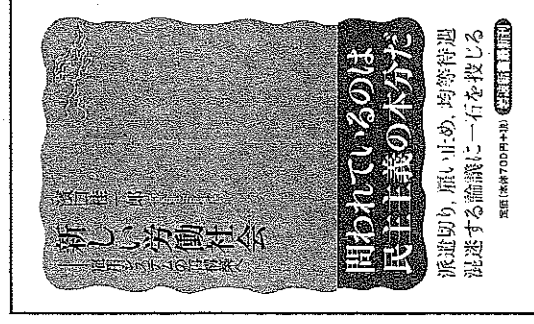


新しい労働社会

一雇用システムの再構築へ

はまぐちけいいちろう
濱口桂一郎 著

岩波書店 刊 700円 (税別)



ここ数年、労働問題は、例えば「名ばかり管理職」「ホワイトカラーエグゼンプション」「偽装請負」「派遣切り」など社会の注目を集める大きなテーマとなっている。マスコミも特に、8月に衆議院議員選挙が行われ政治問題化したこともあって、こうしたテーマを繰り返し取り上げ、また書店にも労働問題をテーマにした書が溢れている。しかし既刊書の多くは、格差や貧困の実態を明らかにするところまでとどまっていたり、また本書で著者が述べているように「労働や雇用の問題を題材にした議論は、ともすると型にはまった労働規制緩和論と労働規制強化論の対立形式になりがちで問題の本質まで立ち入った議論は乏しい」ように思われる。

本書の特徴は、「雇用システムは、法的、政治的、経済的、経営的、教育的などの様々な側面が一体となった社会的システム」であるとの著者の基本スタンスから、雇用制度の国際比較と歴史的経緯を考察しながら様々な側面から、今後の労働社会のあるべき姿を提示し、具体的な施策まで論じている点であ

る。あえて言う、国際比較も歴史的経緯もそのすべてが述べられているわけではなく、十分ではない点が残念である。

いずれにせよ混迷する雇用論議について、日本の労働社会全体をうまく機能させるためには、どこをどのように変えていくべきか、過度に保守的にならず、過度に急進的にならず、現実的で斬新的な改革の方向性をわかりやすく示した点で、一石を投じたことは間違いない。

なお参考までに本書の構成は次の通りとなっている。

序章	問題の根源はどこにあるか
第1章	働きすぎの正社員に ワークライフバランスを
第2章	非正規労働者の本当の問題は何か？
第3章	賃金と社会保障のベストミックス 一働くことが得になる社会へ
第4章	職場からの産業民主主義の再構築